

佳作

牛のたん生

鹿児島県 鹿児島市立小山田小学校四年 松元 ここみ

「産まるっどお（産まれるよ）。赤ちゃんが。ここみ。」

わたしの家は牛を飼っている。今年も夏休みに、子牛が生まれた。牛をかう仕事はたくさんある。朝早く起きて牛にえさをあげたり、えさになる草をきざんだり、たいひを運んだり、畑にえさになるしりょうをうえたり、病気の牛には薬を飲ませたり、せりの前になると牛をあらったり、ツメを切ったり数え切れないほどの多さだ。あまりにいそがしいので、わたしも手伝いをよくしている。

牛舎からひびいてきた父の声に、夕ご飯を食べていたわたしは、はしも投げて、牛舎に急いだ。すると、母は親牛の「まつひめ」の鼻づなを引いている。まつひめはというと、いつもとはちがう低いうなり声を出して、少し足ぶみをしている。いたみや苦し

みなどでどうしようもないといった様子に、わたしは、息のみ、少しこわくなった。父がいるまつひめのおしりの方を見ると、かすかに黒い物が見えた。よく見ると、子牛の小さな足だ。二本そろえて出てこようとしているようだ。

「ここみ、よく見ているんだぞ。」

エプロンをしてTシャツをかたまでまくし上げた父は、手さぐりするようにして、子牛の足にロープをかけ、引き始めた。もう、首も顔もTシャツもあせや何かで、びっしりになっている。父は、子牛の足を見ながら、

「これは、骨じまりがいいからメスだ。しかも大きなメスだぞ。」

と言った。そして、まつひめのウーツといういきみにあわせて何度もロープを引っぱった。すると、少しずつ少しずつ子牛の足が出てきた。子牛は、白いまくの中で、両足の上に頭を乗せているように見える。父が思いっきり引っぱると、本当に大きな牛が、ズルツ、ズルツと、最後はズルリと白いまくに包まれて出てきた。わたしは、無事に生まれてきてくれてよかったあとと思った。どきどきして見ていたわたしの気持ちは、すうっと軽くなり、命が生まれるっ

てすごいことだなあと思った。

その後、父は、すぐに、子牛の鼻に口をつけてよ
う水をすい出し、子牛のへそなどにいじょうがない
かをたしかめた。すると、子牛はブルッブルッと頭
をふって元気な様子で周りを見回した。それを見た
父は、もうだいじょうぶというように子牛の頭を二
度やさしくたたくと、牛小屋から出て来た。そして、
自分の顔を、タオルでふきながら母とわたしに、
「やっぱい（やっぱり）メスだ。しっかりふいてあ
げよ。」

と言った。母とわたしは、何まいものかわいたタオ
ルで子牛の白いまくについた口や鼻、ぬれた体をよ
くふいた。

今、その子牛は元気に育ち走り回っている。一番
さびしいのは、世話を続けているこの子牛をせりに
出すときだ。いつも別れの日は、父も母もわたしも
なみだぐむ。でも、生活のためにはしかたない。わ
たしは、これからも牛に関わりながら、牛に対して
ありがとうと感しゃの気持ちをもつことをわすれず、
自分ができる手伝いをしていこうと思っている。